

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第161号

イザヤ 65:1

平成21年2月27日

イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちがひそかにみもとに来て言った。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現れ……にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます……だが、これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。そのとき、人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。

いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかくなって、葉が出て来ると、夏の近いことが分かります。そのように、これらのことのすべてを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことは決して滅びることがありません。ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っているのです。

マタイの福音書 24 : 3-36。 付点付加

マタイの福音書はイエスがオリーブ山で語られた五つの教えを記録していますが、その最後はキリストの再臨、世の終わりの預言です。過越の祭りの六日前にベタニヤに着かれたイエスは、安息日の食事を多くの人たちとともにされ、その翌日の日曜日の朝、祭りに来ていた大群衆に出迎えられ、エルサレムに入城されました。三年半のガリラヤでのミニストリーで行なわれた数々の奇蹟に加えて、直前にも、ラザロを墓から蘇らせる（肉の体への蘇生）というイエスの奇蹟を目撃していた人々は、このナザレ人イエスこそ間違いなく、ヘブル語（旧約）聖書が証してきたユダヤ人のメシヤ「イスラエルの王」であると確信し、しゅろの枝を振ってイエスを迎えたのでした。都中がこぞってイエスをメシヤとして迎え入れ喜び騒いでいるのを不快に思った宗教家パリサイ人は群衆を黙らせるようにとイエスに迫ったのでしたが、「わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます」（ルカ 19 : 40）とイエスは答えられ、この日ばかりは、ご自分がイスラエルの王であることを公に宣言することをはばかられなかったのです。後にも先にもイエスをご自分を王として民衆の前に顕わされたのはこの日だけで、ダニエルが「**油注がれた者、君主（が）来る**」と預言したのはこの日のことでした。

エルサレム入城後、過越しの子羊がほふられる日の真夜中に弟子ユダの裏切りによってイスラエルの宗教的指導者たちによって逮捕されるまでの四日間、イエスは日中はエルサレム神殿で群衆に話をされ、夜間はベタニヤで宿泊されたのですが、そのとき、弟子や人々の質問に対して答え、語られたのがマタイ 24-25 章、マルコ 13 章、ルカ 21 章に記されている一連の終末預言でした。冒頭にその一部を引用しましたが、弟子たちはこのとき、イエスが「**祝福あれ。主の御名によって来られる方に**」とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません」（マタイ 23 : 39）と言われた終末の出来事が「いつ起こるのか」、「再臨のしるしは何か」、「世の終わりのしるしは何か」の三つの質問をしたのでした。

イエスはこの過越の祭りの子羊がほふられる日、ニサン十四日（多くが、この日を西暦三十二年四月十日と割り出している）に、「**世の罪を取り除く神の小羊**」（ヨハネ 1 : 29）としてご自分をささげ、全人類の罪の身代わりになって十字架上で死んでくださり、天の父の御許に帰られたのでした。その後、西暦七十年の夏、ローマの将軍ティトゥスによってエルサレム神殿が焼失し、国、都を失ったユダヤ人たちが全地に散らされたことによって、イエスが神の裁きとしてエルサレムとユダヤ人に起こると預言された悲劇（マタイ 23 : 36-39、ルカ 21 : 20-24）は現実のことになったのですが、冒頭に引用した終末預言の成就でないことは明らかです。

ラテン教父として知られているヒッポの聖アウグスティヌス以降、各福音書に記されているよく似た出来事をすべて一つの出来事とみなす解釈法が定着し、四福音書の各々特徴ある異なった記述をそのまま受け止めるのではなく、取捨選択後、調和させてキリストの生涯を描くことが伝統となり、千七百年近くも聖書の注意深い研究はなされてきませんでした。まさに解像力の弱い望遠鏡で遠方を見るようなあいまいさが聖書解釈に定着して

しまったのです。しかし、ギリシャ語やギリシャ思想に基づくのではなく、初代教会の時代にそうであったように、ヘブル語やヘブル思想に基づいて聖書を解釈する原点への復帰が二十世紀後半から起こり、今日、旧新約両聖書に一貫している聖書の原則、象徴を正しく解釈することによって、異なった場所、時期、視点、異なった人々に向けて語られたイエスの教えの解明が目覚ましく進んでいます。精巧な望遠鏡でイエスの語られた終末預言を見ると、そこにはまさに、近未来か遠未来に向けられたのかで福音書著者の焦点の違いがあるのです。ルカが、エルサレム包囲に関する警告を告げたイエスの近未来預言（西暦七十年のエルサレム崩壊）に焦点を絞ったのに対し、マタイとマルコが終末末期の艱難期に焦点を置いていることは、イエスが「**預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべきもの』が、聖なるところに立つのを見たなら……**」（マタイ 24：15）と、西暦七十年のローマ軍による包囲時には起こらなかった、聖所を汚す出来事に言及しておられることから明らかです。

過去、イエスの再臨に関わる預言を正しく解釈するための試みがいろいろなされてきましたが、鍵は「**これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません**」とイエスが言われた「この時代（別訳では「**世代**）」をどのように解釈するかにあるようです。聖書が「**一世代**」を何年とみなしているのかが分かれば、終末の末期に当たるその世代に、イエスが「**これらのこと**」として預言された「**すべてのことが起こる**」のですから、最後の世代とはいつなのか、一体何年続くのかの予測を立てることができるのです。「**ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも知りません。ただ父だけが知っているのです**」と、預言の成就の日時を計算することが愚かで不可能であることを警告された主は、しかし、霊的に盲目だったパリサイ人やサドカイ人に対し「**空模様の見分け方を知っているが、なぜ時のしるしを見分けることができないのですか**」（マタイ 16：3、付点付加）と非難され、また、エルサレムの崩壊を預言されたとき、「**おまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ**」（ルカ 19：42、付点付加）と、嘆かれもしたのです。日時を言い当てるのではなく、聖書の記述に従って「**とき**」を正しく予測し、備えることは大切なのです。

伝統的に「**聖書の一世代は四十年**」と言われてきましたが、果たして聖書的に裏づけられるでしょうか。この見解は、出エジプト後モーセ率いるイスラエルの民が神への反逆のため、二人を除く二十歳以上のすべての者が死ぬまで、四十年間荒野で放浪しなければならなかったことに因むようですが、実際には四十年は裁きの期間で、そのとき死んだ者の多くは六十歳以上であったとみなされるので、むしろ一世代は六十年とみなすこともできるのです。アダムとエバに始まった人類史の各世代の寿命を今日までたどってみますと、面白いことが分かります。アダムは 930 歳、一番長寿のメトセラは 969 歳、ノアは 950 歳というように大変な長寿で、神の特別な御目的のゆえに 365 歳で天に引き上げられたエノクを除けば、ノアの洪水までの人類の平均寿命は 912 歳、しかしその後、セツは 600 歳、ヘブル人の父と言われているエベルは 464 歳、大陸が分かれた時代のペレグは 239 歳、アブラハムは 175 歳、モーセは 120 歳という具合に放物線を描いて減少し、紀元前 1000 年頃のダビデは 70 歳で亡くなり、ダビデの時代以降は今日に至るまで三千年間ほぼ一定で、寿命は 70-80 歳とみなされるのです。また、今世紀に入って、2002 年の調査ではイスラエルの平均寿命は 79 歳（男 77 歳、女 81 歳）で、2025 年には 82 歳になると予測されているようですが、「**神の子モーセの祈り**」と表題の付いた詩篇 90 篇にも、「**私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年**」とあり、この齢を聖書の一世代とみなすことは妥当といえるようです。

終末預言に引き続いてイエスが語られた「**いちじくの木のとえ**」のいちじくの木を、今日、多くの聖書教師は、国連の決議によってイスラエルが国家として認められた 1948 年 5 月 14 日とみなすことで一致しています。まさにイザヤが預言したように、シオンは一瞬にして産み出されたのです。いちじくの木がイスラエルの象徴であることを裏づける聖句は旧新約両聖書の至る所にありますが、士師記 9：8-15 のカナン地の木々のたとえは、オリーブ、いちじく、ぶどうの木すべてがイスラエルを象徴するものであることを物語っているユニークな箇所です。かつて聖書の一世代を四十年とみなしていた時代、イスラエル国家が誕生して四十年後の 1988 年にまだ主の再臨が成就しなかったため、イスラエルの象徴は「いちじく」ではなく「ぶどう」で、エルサレムの象徴が「いちじく」であるから、アラブ諸国との六日戦争の結果、イスラエルが奇蹟的な勝利で東西エルサレムを占拠した 1967 年 6 月 10 日こそ「**いちじくの木のとえ**」であると解釈も生まれましたが、いずれにせよ、1948 年のイスラエル国家の誕生からすでに六十年を経た今日は、まさにキリストが語られたすべてのことが起こる世代、終末末期の最後の世代であると言って間違いのないようです。

聖書の一世代が七十～八十年であるとするなら、あと十年から二十年足らずのうちに、産みの苦しみの初めとして「**多くの反キリストの出現、民族間、国家間の戦争、世界中至る所に飢饉と地震**」、引き続き「**迫害、虐殺、裏切り、憎み合い、多くの偽預言者による惑わし、不法のはびこり、愛の冷え、『荒らす憎むべきもの』反キリストによる独裁、奇蹟や超自然的なことに選民さえも惑わされるかつてない大艱難**」の時代に突入することになるのです。しかし、「**日数が少なくされなかったら、ひとりとして救われる者はない**」絶望的な状態に追い詰められたとき、まさにこの世のすべてが完全に失われたとき、栄光の主が来臨され、忍耐をもってメシヤの出現を待ち望んだ者たちは天の四方から集められ、神の国へと招き入れられ、メシヤの支配が全地に及ぶことになるのです。